7．上顎智歯に関するＸ線学的観察

口腔外科学第二講座
窪田　正樹

智歯は人類の歯牙のなかで最も退化現象が著しく，なかでも上顎智歯は下顎智歯に比べ，先天性欠損を生じやすく，最も退化が進んでいると言われている歯牙である。これまで上顎智歯の状態を詳細に観察した報告は少なく，さらに特定の年齢集団を対象とした報告は極めて少ない。今回我々は，20歳代の上顎智歯の状態を明らかにするため歯軸傾斜角度，萌出の程度，上顎洞との関係，歯根数についてパノラマＸ線写真を用いて統計的観察を行った。対象は1986年～1992年までの７年間の20歳代の本学歯学部臨床実習生601名（男性531名，女性70名）で，上顎第１，第２大臼歯の正常萌出している上顎智歯952歯を対象とした。歯軸傾斜角度は河本らの下顎智歯の歯軸傾斜角度測定方法を上顎に引用して計測した。結果を10度ごとの傾斜度群として分類したところ，-10度をピークとする分布を認めた。萌出の程度は，W．H．Archerの分類に従い行ったところ，智歯歯冠の最下点が第２大臼歯咬合面よりも低位のものが半数以上を占めていた。上顎洞との関係は，W．H．Archerの分類に従い行ったところ，上顎洞と智歯とが接してみえるものが約半数に認められた。歯根数は１根のものが大部分であった。歯軸傾斜角度および萌出の程度の関連についてみると，近心傾斜を示すものや遠心傾斜の強い上顎智歯では，萌出の十分ではないものの割合が高くなっていた。萌出の程度と上顎洞との関係の関連をみると，十分に萌出しているものよりも，低位にある智歯に上顎洞と接しているものの割合が高かった。

8．精神発達遅延患者における全身麻酔下歯科治療の検討

口腔外科学第一講座
前田　　淳

精神発達遅延患者においては，患者の協力が得られないなどの理由から，通常の局所麻酔下の歯科治療が困難な場合が少なくない。この様な患者では，全身麻酔下に歯科治療が行われることが多く，近年，医療福祉に対する関心の高まりとともに，当科においても患者数は増加傾向にある。これらの患者の治療においては，口腔外科，保存科，補綴科など，複数の科の領域にまたがることが多く，これらの診療科のチームアプローチの必要性が指摘されており，われわれも患者に応じてチームアプローチにより歯科治療を行うことが多くなってきた。今回，われわれは，平成３年１月から平成４年12月までの過去２年間について，全身麻酔下で治療を行った精神発達遅延患者について検討したので，その概要を報告した。

9．顎顔面領域Ｘ線写真画像解析システムの研究
―解析装置の信頼性について―

口腔外科学第二講座
増崎　雅一

私たちの領域において，臨床診断，経過，予後を観察する方法としてＸ線写真，Ｘ線CT写真等を併用した診査が一般的であります。しかし，顎顔面部Ｘ線写真においての肉眼的透過像，不透過像の評価は，個人差も考えられます。

そこで，その臨床状態をＸ線写真からより明瞭に捕える手段として，Ｘ線画像解析システム（オリンパス社製のＴＶＩＰ4100＋画像解析ソフト4198から構成されるＸＬ-500）を応用し，鮮明な画像として，そのＸ線写真の肉眼的透過像，不透過像を客観的に評価することが，病変検出，病変経過に役立つのかどうかを目的に検証することとし，その概要を報告いたしました。